

運動の発生障害における動感地平分析の有効性に関する一考察 —体操競技における鉄棒の「後方2回宙返り下り」を例にして—

Eine Betrachtung über wirksam die kinästhesiologischen Horizontanalyse für die genätische Hinderungen der Doppelsalto rw. gehockt am Reckübungen

仲宗根 森 敦

Moriatsu NAKASONE

Zusammenfassung

Der Zweck dieser Betrachtung besteht darin, die wirksam die kinästhesiologischen Horizontanalyse für die genätische Hinderungen der Doppelsalto rw. gehockt am Reckübungen im Kunstturnen zu konsituieren.

Darum wurde dieser Analyse vom kinästhesiologischen- morphologischen Standpunkt aus betrachtet.

Dadurch konnten wir einige erfolgreichen Informationen darstellen, um die wirksam die kinästhesiologischen Horizontanalyse.

Suhtlusseslwork: Kunstturnen, kinästhesiologie, Reckübungen

I. はじめに

運動が行われる現場では、できていた動きができなくなる学習者にしばしば遭遇する。そのような場面に
出くわした指導者は、できなくなった動きを学習者に
どのようにして再び発生させるかという問題を突きつ
けられる。その際には、学習者のパトス世界⁽¹⁾に共
感し、いつ、どんな動きを、どのようにして行わせる
かという能力が指導者に必要となる。つまり指導対象
を分析した上で、指導方法を即座に構築しなければならないのである。金子⁽⁶⁾によれば、指導者に必要な
学習者に動感⁽²⁾という、動ける感じを発生させる能
力を促発能力といい、ここでいう促発とは、動感運動
の形態発生を促すことであり、生徒や選手が運動を学
習するときに、自ら動けるようになる感じを伝えるこ
とを意味している。促発能力の発生分析、つまり「促
発分析とは、指導者が学習者の動感形態化のために、
その動感志向性を胚胎している生命的な創発身体知を
超越論的に分析する」⁽⁶⁾ことを意味している。創発身

体知とは、端的にいえば自らの動感運動を形成する選
手自身の身体能力であり、創発身体知の分析能力であ
る創発分析能力とは、「私の動ける感じを私の身体と
いう固有領域のなかで、その動感意識の受動的発生始
原にまでもさかのぼって分析できる能力」⁽⁵⁾である。
「創発分析能力は指導者として生徒や選手に動感発生
を促すための促発分析に不可欠な基礎を提供する」と
金子⁽⁵⁾は述べるように、指導者の促発能力を解明す
ることは、その指導者自身の創発分析能力を解明す
ることを前提としなければならない。本論は、指導者の
促発能力を支える創発分析能力を明らかにする必要が
あるとの考えの下、現在週5日、大学生を対象に体操
競技の指導を行っている分析対象者である筆者自身の
創発分析を行い、その過程を発生運動学⁽³⁾の立場か
ら分析することで、指導者の促発能力の解明に取り組
む。その創発分析の内容は、発生障害に陥った筆者
自身のパトス世界を考察し、動感地平構造分析⁽⁴⁾（以
下、地平分析とする）を行うことで、指導者における
地平分析の有効性の例証を示すことが本論の目的とな
る。

Ⅱ. 予備考察

1. 本論で扱う発生障害の概要

運動の障害といわれるものには二つの意味があると金子⁵⁾は述べている。一つは「心身障害者に出現する病理学的な運動障害や、いろいろな身体的事故やスポーツ障害などによって運動機能に出現した障害が意味」⁵⁾される。もう一つの運動障害は、「生理学的身体として客観的にはどこにも原因がなく、思うように動けるはずなのに、いっこうに〈そう動けない〉という場合の運動障害」⁵⁾である。前者の運動障害は、専門の医師や療法士の治療対象になっている、いわば障害やケガのために、できない動作、できなくなった動きかたの根拠と考えられている生理学的な対象身体を正常に戻すことであり、専門的な仕事は医学的な領域に任されている⁵⁾。本論で扱う運動障害は後者の場合であり、運動の場面で目の当たりにする、体の機能としてはどこにも問題がないけれども動けるはずなのに動けないという場合の運動障害である。分析対象者は、体操競技を初めて現在8年目であり、指導者としては4年目である。小学生を対象に2年間体操競技の指導を行った後、現在は大学生を対象に指導をして2年目になる。分析対象者の身体的特徴としては、身長が172cmと体操競技では比較的大柄であり、大学に入学するまではサッカーを専門としていたため、体操競技を始めるまで体操競技における空中での感覚はほとんど皆無であった。分析対象者は体操競技を始めて2年目の大学2年生の秋に、初めて後方かかえこみ2回宙返り下りをつり輪で行った。そして大学2年生の冬、鉄棒において後方かかえこみ2回宙返り下り（以下、後方2回宙返り下り）（図1）を行った。3年生の春にはつり輪、鉄棒の2つの種目において競技会で実

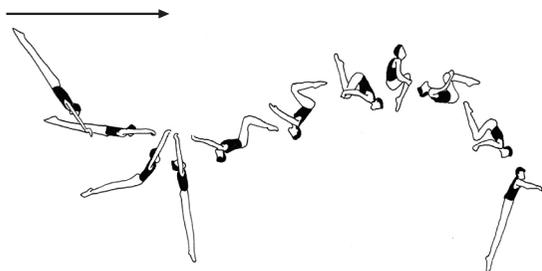


図1 後方かかえこみ2回宙返り下り
（文献3より筆者が加工し転載）

施し成功している。分析対象者は大学3年生の秋の練習において後方2回宙返り下りを実施した際に、手を鉄棒から離れた後、鉄棒のバー（以下、バー）に後頭部を強打してしまった¹¹⁾。幸い、大事に至るケガではなかったのだが、それ以来分析対象者は後方2回宙返り下りを行うことができなくなってしまった。この場合は、身体の機能としてはどこにも問題はないのだが、できていた動きを発生させることができない場合の運動障害であると考えられる。前述した運動障害を生理的な意味で使う場合の運動障害の意味と取り違えないようにするため、動きの発生における運動障害を本論では端的に発生障害というように用いることとする。

2. 先行研究の概要と本論の射程

以前分析対象者は、拙論において自身の創発分析を行い、運動アナログン⁶⁾を用いて様々な運動を行うことで、後方2回宙返り下りのコツを明らかにした¹¹⁾（表1）。分析対象者自身の運動経験を分析し、できる動き、できない動きの中から、分析対象者自身の後方2回宙返り下りのコツを明らかにした作業は、動感運動に匿名的に働いている地平志向性を明るみに出す地平分析であると考えられる⁷⁾。しかしながら、拙論においては、後方2回宙返り下りを実施するための分析対象者自身のコツを明らかにした考察に留まっており、受動的な意識を能動意識に引き上げる過程を詳しく述べているとはいえない。ここでいう受動的な意識とは、コツ意識を支え働いている自我の関与がない意識であり⁷⁾、能動意識とは、運動の遂行中に感じる事ができ、運動を修正する際に注意することができる意識である。例えば、金子⁷⁾は、我々が普段ジャンプをする際に、「腕を振り上げて急ブレーキをかけてジャンプすることはあまりにも当たり前の動きかたなのでその含意の意味づけをつい見過ごしてしまいます」と述べ、腕の急ブレーキがジャンプをする際に受動的な意識として働いていることを取り上げている。本論では、発生障害に陥った分析対象者の動きの意識の背景に隠れている受動的な動感意識を、意識の表面に移行させる過程に分析対象者自身で注目させた地平分析の内容を明らかにする。

表1 現在の「後方2回宙返り下り」のコツ (文献11より筆者が一部修正して転載)

後方2回宙返り下りの動感意識	
安全な離手のコツ	<ul style="list-style-type: none"> ・倒立経過時にぬき動作をしやすくするために、背を丸め肩甲骨でバーを押すように振り下ろしに入る ・振り下ろしの際に、あふり動作を意識しておこなうため、自分から足先を遠くにし、肩を脱力するようにぬき動作を積極的に行う ・肩のあてを行うため、あふりは腰あふりで瞬間的に行う ・とび出しの際の方向は、肩で決める ・バーに近づかないようにするため、肩角度を開くようにして離手を行う。その際、手首を背屈させ、バーを後ろにはじくように鉄棒を離す ・離手時にはお尻をバーに向けないようにする
まわり方のコツ	<ul style="list-style-type: none"> ・膝をむかえにいくようにかかえ込み動作を行わない ・かかえ込み動作は、腰あふり→かかえ込み、というように時間的に少しズレがあるため、腰あふりとひざのかかえ込みを同時に行うようにしない ・かかえ込み動作の際は、体の倒しを利用し、反動を使って膝を胸に持っていくことで回転の効率を高める ・背中を丸めるように、上目使いでまわるため、首は背屈し過ぎないようにする ・かかえ込み動作を瞬間的に小さくなるように行うことで回転を助けるため、ゆっくりかかえ込み動作を行わないようにする
上記の動感意識はバラバラであるのではなくひとつのメロディーにまとまっている	

Ⅲ. 地平分析

木下¹⁰⁾は、先行研究においてマット運動における伸膝後転の創発分析を行っている。指導者である自身の創発分析から、そのコツ意識を、腕でしっかり支え伸ばす、回転の勢いをつける、と述べ、手のひら全体がマットに着く時期に腕の支え伸ばしを開始する、腕の操作の仕方を先取りする、腕で体重を受け止め、支えながら後ろに回れるといった動きがコツ意識を支えていると述べている¹⁰⁾。このように、本人のコツ意識を支える背景の動きを明らかにすることが創発分析における地平分析の内容である。さらにそこで明らかになった動きを故意に消去することで、そのコツ自体が成立しないことを確認し、確実に失敗するという共通点を通じ、これさえやらなければ失敗しないという縁どり分析⁶⁾を行うことで、取り除いてはならないコツを明らかにすることができる。本論では、紙面の都合上、先行研究で行った運動アナログンをすべて取り上げることはできない。そのため、後方2回宙返り下りができなくなった分析対象者が、再び実施できるようになったコツ意識を明らかにするために有効であったと考えられる運動アナログンを4つ取り上げ地平分析を行う。

1. 懸垂前振り～後方宙返り下り（意図的に鉄棒のバーに足の裏を当てる）の地平分析

分析対象者は、バーに後頭部を強打した後、できなくなった後方2回宙返り下りを行おうとするのではなく、頭越しの回数を1回で行うことができる懸垂前振り～後方宙返り下り（意図的に鉄棒のバーに足の裏を当てる）(図2)という課題を取り上げた¹¹⁾。当初分析対象者は、発生障害の後に後方宙返り下りを行う際に鉄棒のバーに接近したくないために何度もバーから離れるように後方宙返り下りを繰り返し、バーから離れるためのコツを探していた。着地位置が鉄棒と離れることはできたのだが、絶対にバーに近づかない動きを明らかにすることはできなかった（意識することができなかった）。そこで、分析対象者はバーに近づくことを課題とした。なぜならば、確実にバーに近づく動きを明らかにすることで、これさえしなければバーに近づかないという動きの縁どりを捉えることができると考えたからである。このバーに近づきたくないためにあえて近づくという課題を設定することによって、バーより離れて着地することができるための受動意識に目を向けることができた。

分析対象者は、お尻をバーにむけるように離手するとバーに近づく、という動きを先行研究で明らかにしている¹¹⁾。ここでいうお尻をバーに向けよう離手するという表現は、目で見た形態のことを意味してい

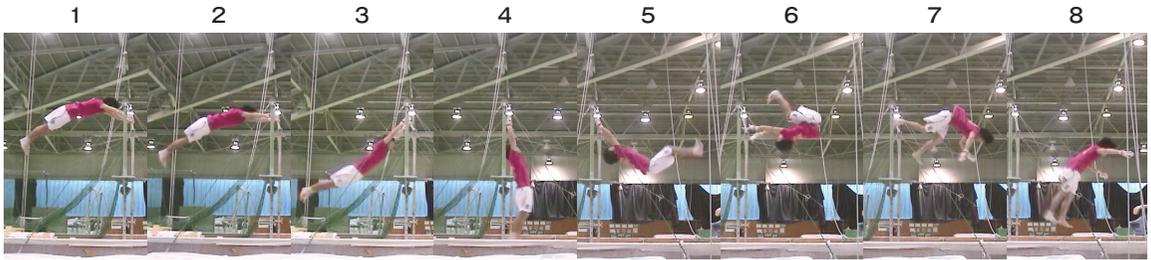


図2 懸垂前振り～後方宙返り下り（意図的に鉄棒のバーに足の裏を当てる）

るわけではなく、分析対象者の動きの感じとしてお尻をバーに向けるという表現である。お尻をバーに向けた後に離手を行う動きの意識は、離手時に肩角度を狭くし、膝の曲げと腰角の減少が同調して行われた動きであり、バーに接近する動き¹³⁾であると考えられる。この課題により分析対象者は、お尻をバーに向けるよ

うに離手を行わなければバーに接近しない、という以前は受動的な意識としてコツ意識の背景に留まっていた動きを意識の表面の能動意識に引き上げることができた。この課題で明らかになったバーに近づかない離手の仕方の地平分析を図式的に示したのが図3である。

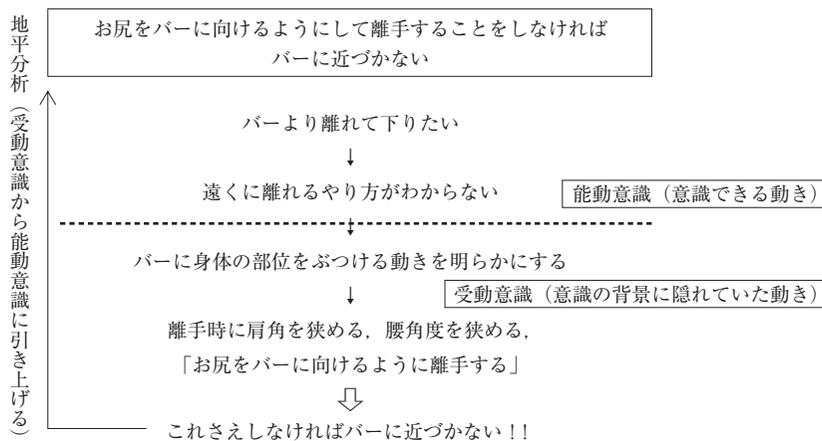


図3 バーに近づかない離手の仕方の地平分析の図式

2. 反動～後方宙返り下りの地平分析

懸垂前振り～後方宙返り下りを行う際、我々はどうのように離手をしているのだろうか。金子³⁾によると手を後ろに振り放す、また本間²⁾は振動前振り小さい宙返りの際の離手の仕方について、前方に振れて振動の極限に達し、体の振動運動が瞬間停止する、という時期に於いて一気に静止懸垂宙返りを行うと述べている。しかしながら、いつ、どこで、どのように後方宙返り下りの離手を行うのが明確でなければ、手がバーから離せなくなった際に、後方2回宙返り下りだけでなく後方宙返り下りまでできなくなってしまう

可能性がある。ここでは、懸垂前振りではなく、反動を利用して後方宙返り下り（図4）を行うことで、離手の仕方のコツを支えている受動的な意識を明らかにした。この課題で分析対象者は、まず反動をつけるため懸垂で静止した姿勢から、足先を後ろに残すようにして前方に向かって肩角度を開き、バーを後方に肩甲骨で押さえるようにした（図4、1コマ～2コマ）。次に押さえたバーのしなりが返ってくるのに合わせて、今度は肩甲骨でバーを前方下に押すように肩角度を狭め反動を生み出した（図4、3コマ～5コマ）。さらに、足先が前方に振り出し始めた後、下半身が先行し、身体が上方に引っ張りあげられ足先がバーの高さ

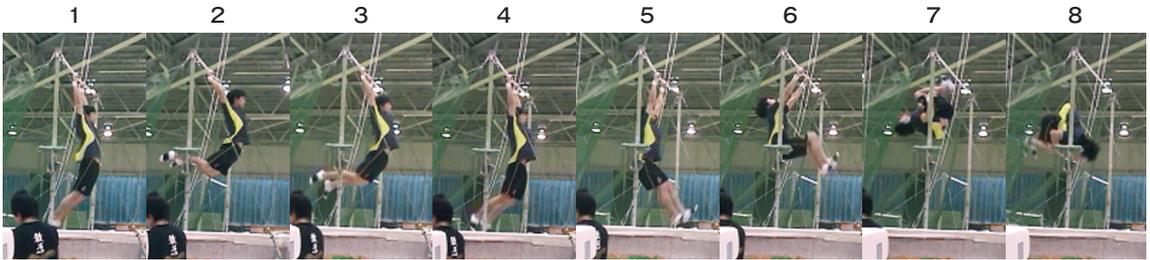


図4 反動～後方宙返り下り

まで上がりきらないうちに離手を行うことで、課題を達成できることが明らかになった(図4, 5コマ～8コマ)。この課題では、懸垂時における斜め上方の位置に向かって身体を引き上げるあふり動作の最中に、

バーを離すという後方宙返りを行う際のコツ意識を支えている離手の仕方と時期が明らかになった。離手の仕方と時期の地平分析を図式的に図5に示した。

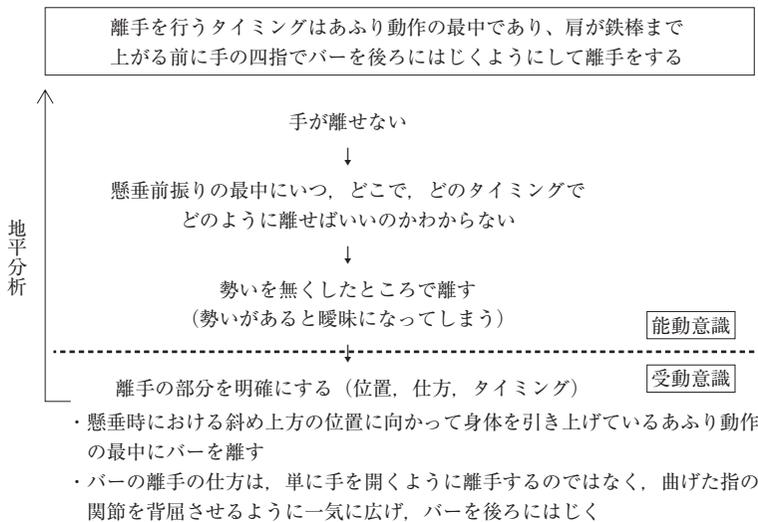


図5 離手の仕方と時期の地平分析の図式

3. トランポリンにおける腹打ち～後方宙返りの地平分析

分析対象者は、2回宙返りを実施している際にどのように回転しているかが明らかにならないといけな

て¹⁾、もしくは鉄棒の手放し技の練習⁹⁾において用いられるものである。この課題は、頭越しの回転は一度だが、勢いの付け方や回転の仕方、頭越しの局面の感覚が鉄棒の後方2回宙返りの2回目の頭越しの局面と動感的に似ていると考えたからである。この課題は、きちんと自分で回転力を生み出す方法がわからない運動者や、後方2回宙返りの経験が少ない運動者は、頭から地面に落ちてしまいそう、もしくはいつどのタイミングでどのようにまわれればいいのか分からないという意識が強く、躊躇してやりたがらない。地平分析を通じて明らかになった実施してはいけない動き方は、はやくまわりたいが為にお辞儀をするようにして、上

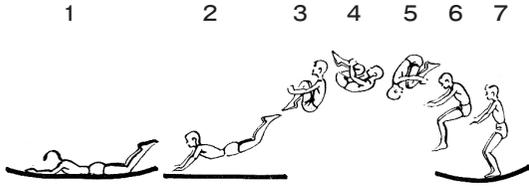


図6 腹打ち～後方宙返り
(文献1より筆者が加工し転載)

体を折りたたみ膝を向かえにいくようにしてかかえ込み動作を行うことである。そうした場合、回転力を抑制してしまう。この際の回転力を生み出す順序は、腹

打ちのあと一度上半身を回転方向に先行させながら起き上がる（この動きの確認として一度下、もしくは手前を見る）(図6, 3コマ)。その後、背を丸め、首を背屈させながら上半身を回転方向に先行させて動かす（このときまだ下半身は意識的に回転させずに残しておく）(図6, 3コマ～4コマ)。そして、頭越しの瞬間（着地位置を見に行く直前）に一気に腰を曲げ、膝を胸に持ってくるようにかかえ込みの動作を行うことである（図6, 4コマ～6コマ）。この課題から、分析対象者の後方2回宙返りの2回目の頭越しの宙返りを支えている受動的な動感意識が確認された（図7）。

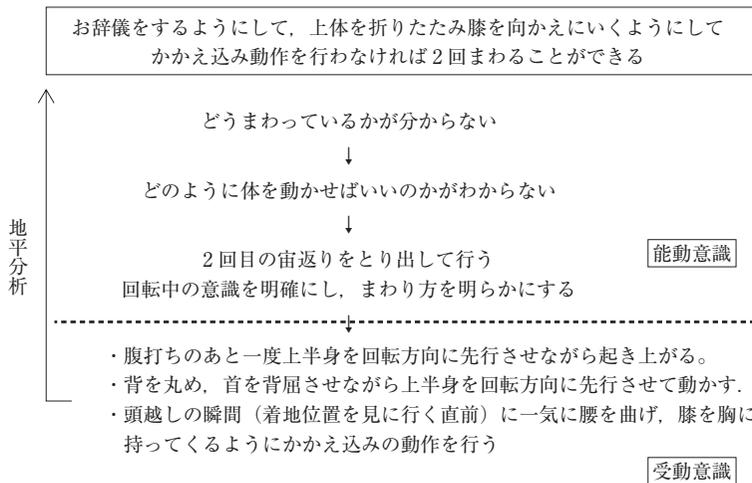


図7 2回宙返りのまわり方の地平分析の図式

4. 平行棒における棒端縦向き後方2回宙返り下りの地平分析

分析対象者は、懸垂後ろ振り（肩の高さがバーと同じくらい）～懸垂前振り～後方2回宙返り下り、懸垂後ろ振り～手を一回たたき～懸垂前振り～後方2回宙返り下り、といった課題において後方2回宙返り下りを実施する際の状況を変容させて行ない成功させてきた¹¹⁾。しかし、どんなことをしたらできなくなるのかという後方2回宙返り下りができるコツ意識を支えている受動意識を明らかにする必要があると考えた。どの場面になるとできないのかが明らかになれば、その場面にならないようにすれば後方2回宙返り下りができる、というコツの縁どりになると考えたからである。そこで、平行棒において棒端縦向き後方2回宙返り

り下り（図8）という課題を行った。なぜならば、器具は違うが、この課題は離手のタイミング、後方2回宙返りのまわり方は鉄棒における後方2回宙返り下りと形態的にも動感的にも類似すると分析対象者自身の

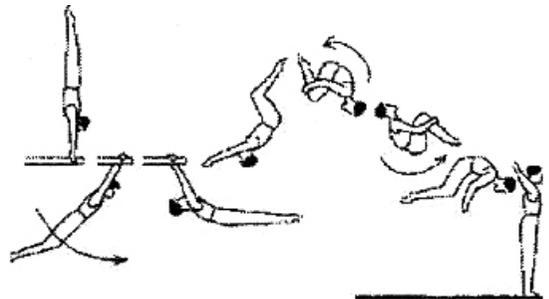


図8 平行棒における棒端縦向き後方2回宙返り下り
(文献12より筆者が加工して転載)

経験から考えられたからである。分析対象者は、この課題を実施してみた際に、一回目の頭越しが終わったあと、回転を止め、背中から落ちてしまい、2回まわることができなかった¹¹⁾。その際に分析対象者は、平行棒のバーを視覚で確認し、そのバーが非常に近かったと感じられた。分析対象者は、実施中に器具が近いと感じたために、途中で器具に当たることを想定してしまい、まわるのを止め必死であったとしても痛くないように体を硬直させてしまったのである。この課題で明らかになったことは、分析対象者自身が鉄棒にお

いて後方2回宙返り下りをやろうと思えばできるという動感意識の背景には、実施中、バーに近いと感じなければ動感意識によって支えられていることが確認された。つまり、分析対象者はどんな条件で後方2回宙返り下りを達成しても、バーが近いと感じられた際には動きのメロディーが崩れ運動をやめてしまうことが明らかになった。この課題では、どうすればまわるかというのではなく、どうならなければまわるかという分析対象者の動感意識が明らかにされた(図9)。

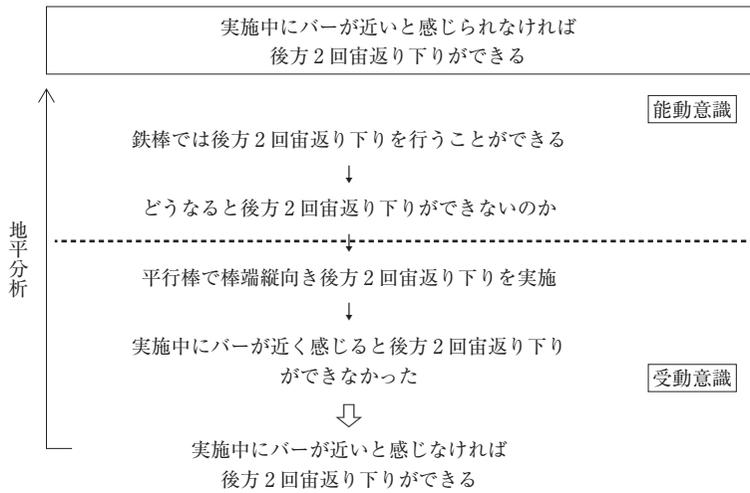


図9 後方2回宙返り下りが実施できる地平分析の図式

IV. 転機分析の重要性

私たちは、できていたことが急にできなくなるという状況にしばしば出会う。コツが突然狂いだし、今まで何の苦勞もなくできていた動き方が急に消滅し、その状況に入ると、私のカンが働いてとっさに動けたのに、何の前触れもなくそのカンが突然消えてしまった悔しさは競技スポーツに打ち込んだ誰もが経験している。金子⁸⁾は、そのようなコツやカンの消滅を「ヴァイツゼッカーは、選手生命を脅かす危機ではなく、転機と呼んでいる」と述べている。ある運動を発生させようとする際にはこうしようか、ああしようかという悩みがつきものであり、転機発生は悩ましい場面とよく似ているというのである⁸⁾。私たちが競技を行うことは人間が行うものであり、その深層にはパトス体験が息づいている⁸⁾。パトスという言葉は日本語

で受苦とか情念とかの邦訳があり、そこには歓喜の発生瞬間もあれば、悲観に突き落とされる消滅瞬間もある⁸⁾。いずれにしても感動の体験世界がそこにはある。人間の身体運動はパトス体験の中に悩ましい迷いに苦しみながら転機を導き出していく身体運動である。

分析対象者の発生障害後のパトス世界を考察してみると、後方2回宙返り下りを実施する際には、“そうしようとする Wollen” 分析対象者の決断があったはずである。分析対象者が後方2回宙返り下りをもう一度、“できそうだ Können” と感じた背景には、地平分析を通じて明らかになった、縁どりされた動き方が、分析対象者の“できそうだ Können” を支えていたと考えられる。また、それはピット⁷⁾ といった、“してもよさそうだ Dürfen” という練習環境や、その技を試合で使いたい、“せねばならぬ Müssen” 状況、さらにその技に対する分析対象者自身の価値意識から、

“すべきである Sollen” といったパトス世界の関わりの中で、後方2回宙返り下りをやってもいいと感じられたのである。分析対象者は以前後方2回宙返り下りができなくなったが、それはやろうとすればできる、もしくは追い込まれればできる、そういった類ではない。やるための生理学的能力はあるかもしれない（実際に以前は2回宙返り下りを試合で使っていた）が、後頭部をぶつけたため怖い、今やるに値しない、できそうな気がしない、今の状況ではすべきではないといったように後方2回宙返り下りを実施する気にさえならないのであった。人が運動するという事は、情況が常に関わっているものであり、運動を行う際にはパト斯的運動として動感運動の受動発生の地平、別言すればその時に動きつつある自己は関与しないまま、動感形態が成立するのである⁵⁾。金子⁸⁾は、そのような「転機現象に悩む選手を指導できるコーチ、その転機のパトス体験に身体移入できる指導者こそスポーツ運動学の専門家である」と述べている。

V. ま と め

発生障害に陥る前の分析対象者は、こうすればできるといふ自身のコツを手がかりに後方2回宙返り下りを行っていた。しかしながら、分析対象者は発生障害に陥ることで、どのようにしなければバーに近づかないのか、どのタイミング以外で離手を行ってはいけないのか、どのようすればまわれないのか、さらにどういふ状況だと後方2回宙返り下りができないのかといった、してはいけない動きを地平分析によって明ら

かにした。地平分析によって明らかになったこの動きさえしなければ課題を達成できるという縁どりは、現在の分析対象者のコツの命綱であり、モナドとしての絶対的なコツであると考えられる⁷⁾。動感地平分析を通じてこれまでの考察から、以前は後方2回宙返り下りの実施中の動感はほとんどなかったが、現在では実施中に後方2回宙返り下りを意識的に捉えることができるようになった。また、バーに近づく実施が明らかになることで、バーに近づかない動きが明らかとなった。バーへの近づき方がわからない以前の後方2回宙返り下りでは、どうになってしまうのかわからなく、恐くて離手ができなくなったといった発生障害の原因が明らかとなった。そして、2回宙返りができないやり方が明らかになることで、できないやり方さえしなければ2回宙返りができることが明らかとなった。また、今まで意識に上ることのない受動地平に分析対象者自身で目を向けることにより、無自覚の動き、筆自身者の意識していない動きが明らかとなった。さらに、「怖い」けれど、後方2回宙返り下りができるやり方がわかり、これさえやれば大丈夫という筆者自身の中でのコツが見つかることで、いい実施へ向けて修正活動を行える可能性が出てきた。そして、これまでの地平分析の経験から、他にも発生障害に陥った選手に促発指導を行える可能性が出てきた。一度発生障害に陥った分析対象者における後方2回宙返り下りの地平分析の有効性をまとめたのが表2である。

選手を指導する際には、できなくなった動きをできさせなければならない場面に必ずと言っていいほどに直面する。できなくなった選手のパトス体験に共感で

表2 発生障害における後方2回宙返り下りにおける地平分析の有効性

- ・以前は後方2回宙返り下りの実施中の動感はほとんどなかったが、現在では実施中に後方2回宙返り下りを意識的に捉えることができる
- ・バーに近づくやり方が明らかになることで、それさえしなければバーに近づかない動きが明らかとなる
- ・なぜ、後方2回宙返り下りの離手ができなくなったのかわからなくなった（以前はどうやって離手しているのか、どのようにバーから離れているのかわからなかった）
- ・2回宙返りができないやり方が明らかになることで、これさえしなければ2回宙返りができることが明らかとなる
- ・無自覚の動き、筆自身者の意識していない動きが明らかとなる
- ・自身の運動経験や、動感能力が明らかとなる
- ・怖いけれど、後方2回宙返り下りができるやり方がわかる、つまりこれさえやれば大丈夫という筆者自身の中でのコツが見つかる
- ・いい実施へ向けて修正活動を行える
- ・他にも発生障害に陥った選手に促発指導を行える可能性が出てくる

きるのは、できなくなった技をできるように創発した指導者である。指導者自身のできなくなった苦しみ、できるようになった喜び、その際の生々しい体験は、指導する際の源になる。それがなければ、動かたくてもそう動けないという学習者に共感できるはずもない。本論は、分析対象者である筆者自身の受動的な意識を能動レベルにまで引き上げた地平分析の有効性を後方2回宙返り下りを例として取り上げた。その創発分析における地平分析は、現在の分析対象者自身の指導の源になっている。今後の課題は、できなくなった運動をできるようにした分析対象者自身の創発能力をもとにして、同じような経験をしている学習者に対して促発分析を行い考察することで、指導者の促発能力のさらなる解明に取り組むことである。

金子⁵⁾は、「指導者が自分自身の創発分析能力をもっていないで、学習者の動感意識を促発分析できるはずもない」と述べている。このように促発能力の基礎となっている指導者の創発能力を解明することは、後世にわざを伝承するための重要な課題として挙げられる。本論が指導者の促発能力の解明の一助となれば幸いである。

注

- (1) バトス世界…バトスという概念は、ドイツのヴァイツェッカー¹⁴⁾による医学的人間学の基本概念の一つであり、ヴァイツェッカーはバトスにはカテゴリーがあると述べている。そのカテゴリーには、したい Wollen, ねばならぬ Müssen, しうる Können, すべきである Sollen, してもよい Dürfen という5つがあり、この5つが互いに一定の仕方に関係し合っているという。バトスという表現が運動分析論として使われるときには、動感運動の受動発生の地平も含み、どう動きたいのかどう動くべきなのかどう動いてよいかを決断する始原であるという⁵⁾。人の運動を分析する際には、その運動の価値や実際に行う際の環境や状況と綿密に絡みあっているその人のバトス世界に注目しなければならない。
- (2) 動感…金子⁵⁾によれば、〈動感〉とは現象学者であるフッサールの〈キネステーゼ〉(キネーシス=運動+アイステーシス=感覚)が意味され、私の身体性のなかに息づいている〈動いている感じ〉であると述べている。
- (3) 発生運動学…金子⁵⁾は、人間の運動を物体運動として精密に測定できるものと扱う精密科学的な機械論的身体運動学に対して、人の運動を生き生きとした生命的な運動として扱う目的論的視座に立つ身体運動学を〈発生論的身体運動学〉と呼び、それを簡略化して発生運動学と特徴的に名付けている。本論における発生運動学とは発生目的論的

立場をもつ身体運動学を意味する。

- (4) 動感地平構造分析…人間の運動を生き生きとした生命的な運動と捉える金子⁷⁾の発生運動学における構造分析論では、始原論的構造分析、体系論的構造分析、地平論的構造分析という3つの研究対象から成り立っている。金子⁷⁾は「始源分析が通時態、共時態な幅広さを特徴として身体運動の意味構造に問いかけるとするならば、その動感形態の主語的な解明基体の共存価値を解明する体系分析と並んで、動感深層の術語的な解明項としてこの地平分析はもう一方の極を形づくります」と述べている。本論で重要になるのは、匿名的な動感地平構造を明るみに出すという地平論的構造分析であり、いわゆるコツやカンを明らかにする作業である⁷⁾。金子⁵⁾は「ラントグレーベによると地平とは到達可能と到達不可能が絶えず移り変わる境界にあり、〈私が動ける〉という可能性のすべてを胚胎した総括概念である」と述べている。動感地平構造分析とは「自我身体の運動、端的に言えば、動感運動に匿名的に働いている地平志向性を明るみに出すこと」⁷⁾であり、私ができる動きの感じの構造を意識的に分析することである。そこでは筆者の動きの意識の背景に隠れている動感意識を、意識の前面に移行させる過程に筆者自身で注目させる事になる。これを端的に動感地平分析と呼ぶこともある。
- (5) 運動アナログ…アナログは、形態的・感覚的に類似した運動であり、組織立った新しい運動の習得を容易にする動きである。
- (6) 縁どり分析…研究方法論としての縁どり分析における縁をとるという表現は、ある物の外縁に枠を付けてその境界をはっきりさせるという意味であり⁷⁾、縁どり分析とは現象学的な形態分析を用いて類似した動感形態の間の境界や関係を確認する分析方法論を意味している⁷⁾。この縁どり分析を地平論的構造分析において用いる場合には、故意にそのコツを消去し、動感メロディーを解体してはいけないうコツを確認する消去法によって、ある動きのなかでコツやカンがどのように機能し合っているか明らかにすることができる⁷⁾。例えば、金子⁷⁾は「鉄棒の前回りという子どもに親しまれている動感形態は、握り換えのコツを消去すると、その連続はうまく機能しなくなることは実践の現場ではよく知られていることです」と述べ、消去法によって鉄棒の前回りの握りかえというコツを明らかにしている。
- (7) ビット…補助施設の一つ。器具の下にウレタンの小片をたくさん置き、落下、着地の衝撃を和らげるものである。

引用・参考文献

- 1) 浜田靖一、竹本正男、小田敏彰(1968) 体育図書館シリーズ33 トランポリン、不味堂出版、東京。
- 2) 本間茂雄(1936) 鉄棒運動、目黒書店、東京。
- 3) 金子明友(1970) 体操競技教本Ⅱ鉄棒編、不味堂出版、東京。

- 4) 金子明友 (2004) 体操競技のコーチング. 大修館書店, 東京.
- 5) 金子明友 (2005) 身体知の形成 上. 明和出版, 東京.
- 6) 金子明友 (2005) 身体知の形成 下. 明和出版, 東京.
- 7) 金子明友 (2007) 身体知の構造. 明和出版, 東京.
- 8) 金子明友 (2010) 身体運動の人間のなるもの. スポーツ運動学研究 23 : 1-14.
- 9) 笠松昭宏, 行本浩人, 近藤重彰 (2006) トランポリンとトレーニングチューブを使った鉄棒の手放し技の感覚練習 1, 財団法人日本体操協会男子・女子体操競技強化本部研究部, 研究部報, 95・96 : 45-57.
- 10) 木下英俊 (2010) コツ身体知に関する指導者自身の動感創発分析の意義について—マット運動伸膝後転の事例から—, スポーツ運動学研究 23 : 15-24.
- 11) 仲宗根森敦 (2012) 鉄棒における「後方かかえこみ2回宙返り下り」の発生障害に関する動感志向分析的研究, 体操競技・器械運動研究会 20 : 15-27.
- 12) 日本体操協会 (2009) 採点規則〈男子〉2009年度版, (財)日本体操協会, 東京.
- 13) 佐藤徹 (1985) 鉄棒の3回宙返り下りに関する考察, 北海道教育大学紀要 35 : 23-31.
- 14) ビクトール・ヴァイツェッカー : 木村敏, 浜中淑彦訳 (2010) バトゾフィー, みすず書房, 東京.

(平成24年9月11日受付)
(平成24年12月19日受理)